いのちと地域を守る

東日本大震災の語り部から

在住外国人を担い手に

仙台観光国際協会多文化共生課

堀野　正浩さん

異なる国で暮らす外国人にとって三つの壁がある。一つは言葉の壁。旅行で日本を訪れる人には大きな壁になる。次に制度や文化の壁。バワニさんも日本に4年ほど住んでいたが避難所を知らなかった。

最後は心の壁。日本人は暗黙の了解や曖昧な表現が多い。日本人同士では当たり前のため、外国人が分からないということに気付きにくい。

そういった壁が震災では情報不足による不安と混乱につながった。ライフラインの断絶や物資不足で、外国人は買い物が日本人以上に大変だった。避難所に行っても、文化の違いから摩擦が生じた。

協会は当時、仙台市多言語支援センターを運営し、多言語で情報を発信したり、避難所を巡回して相談業務を行ったりした。

震災の経験や教訓を踏まえて、せんだい外国人防災リーダーの育成に取り組んでいる。在住外国人に防災知識を学んでもらい、同郷の人たちに情報発信したり、地域の防災訓練に参加したりしている。街歩きのイベントも行っている。謎解きをしながら、危険な場所や避難所を覚えてもらう。

災害時の訪日客の問題は交通の遮断だと思う。被災地の外に移動させる具体的な方法を考えることが重要になる。松本市はホテルやいろんなところで外国人が働いている。語学力があり、このような議論にも参加する。もっと外国人の力を借りればいいと思う。

多くが避難所知らない

仙台観光国際協会相談員（ネパール出身）

ドゥワディ・バワニさん

東日本大震災の発生時、仙台市内の百貨店の7階にいた。来日4年目で日本語が不自由だった。初めて経験する大きな揺れに「今日が人生の終わり」と思い、ひどく泣いた。従業員に外に誘導してもらい、子どもたちの通う小学校へ急いだ。

避難所のことは知らなかった。小学校に着くと、多くの人が集まっていた。教員から「怖かったら泊まっていていいですよ」と言われ、ルールが分からない中、見よう見まねで過ごした。日本人と一緒にいられて安心した。

避難所では、文化の違いを感じた。「自由にお取りください」と書いていたら、日本人は一人1個と考えるが、ネパール人は何個も持ち帰っていいと思う。日本で言う「空気を読む」ことも苦手だ。日本の文化を知らない外国人には、はっきり言わないと分からないと思う。

震災の時はネパール人同士集まっても、情報を得ることができなかった。少しは日本語が分かるようになって、せんだい外国人防災リーダーの研修を受けた。仙台市内で暮らすネパール人は増えていて、3000人ぐらいいる。ネパール人の友人たちを研修に誘って、情報発信できる人を増やしている。

もし自分が旅行先で被災したら、安全な場所と正しい情報を求めるだろう。無料で使える公衆電話もあるとありがたい。東日本大震災のときは、家族と連絡がとることができて助かった。

炊き出し体験 備え万全

防災用品の展示や実演も

「炊き出し隊」の防災食づくりを体験する参加者ら＝11月29日、松本市

むすび塾の開催に合わせて長野県松本市の信毎メディアガーデンで11月29日、全国の被災地で活動する「松本市炊き出し隊　みらい」による炊き出し体験会や、防災グッズを販売する企業の商品展示もあった。

炊き出し体験会は被災して電気が止まり、冷蔵庫に残った食べ物を使って調理をする設定で行った。メニューは煮込みハンバーグ、オムレツ、コンソメスープなど。それぞれ具材と調味料をポリ袋に入れて口を縛り、大鍋で沸かしたお湯に入れて加熱した。

段ボールベッドの組み立て体験、災害時に飲料水や生活用水を確保するための非常用浄水器の実演なども行われた。

長野・松本 訪日客増

歴史薫る城下町

地震や大雨経験も

長野県松本市は県の中央部に位置する人口約23万人（12月1日現在）の中核市。上高地や北アルプスといった雄大な自然や、国宝の松本城や旧開智学校などに代表される歴史的な街並みが人気を集め、近年インバウンド（訪日客）が増加している。

市によると、2024年に松本城を訪れた外国人入場者は19万1748人で、前年比30％増となり09年の統計開始以来最多。15年の外国人入場者は9万2539人で、10年でほぼ2倍に増加した。

一方、松本市はたびたび大きな地震が発生している。11年6月に発生した地震では最大震度5強を観測。1人が死亡し、17人が負傷した。14年11月には長野市などで最大震度6弱を観測する地震が発生。松本市では震度4を観測している。

松本市は新潟県糸魚川市から諏訪湖を通って静岡県に抜ける「糸魚川―静岡構造線断層帯」の中北部区間に当たる。国の調査では今後30年以内に14～30％の確率で地震が発生するとされ、松本地域は最大震度6強から7を想定。市では最大1010人の死者が出ると試算している。

大雨で浸水被害や土砂崩落も発生している。19年の台風19号や、翌20年の7月の豪雨では市内全域に大雨特別警報を発表。いずれも上高地で総降水量300ミリを超えた。

松本城と松本市中心部

助言者から

防災と観光 組み合わせ

一般社団法人減災・復興支援機構専務理事

宮下　加奈さん（56）

以前、防災対策を監修したホテルでは平日の日中、火災や津波避難の訓練を行っていた。宿泊客にも「興味があったらどうぞ」と声を掛けた。部屋に置くパンフレットは「防災」という言葉は使わず、カラフルなイラストを多様し、まず「面白そう」と手に取ってもらうような工夫をした。

災害時、訪日客は国や自治体の情報を求める。北海道胆振東部地震では、SNSでさまざまな情報が流れる中、どこで正しい情報が得られるか、困っていた。QRコードを使ってない国もある。ウェブサイトに誘導する際、気を付けたい。

私は三宅島の出身で、噴火災害を経験した。故郷では今、若者たちが災害と観光をセットにした新しい観光案内を始めている。松本でも自然の恵みと合わせて、災害を伝えるガイドを考えてほしい。

住民以外も守る視点を

松本大地域防災科学研究所前所長

木村　晴寿さん（72）

松本城周辺は多くの訪日客がいる。突然の大地震が起きたら、彼らはどこへ逃げればいいか分からず途方に暮れてしまうだろう。まずは「何かあったらここへ」という情報を、多言語のチラシで配るなどして事前に伝えておく必要がある。

たくさんの人数を受け入れるには、市指定の避難所だけでは足りない。民間ビルを含め、もっと幅広く柔軟に設定すべきだ。言葉の壁を越えて情報を伝え、避難後のケアをするボランティアの育成にも、もっと本腰を入れて取り組む必要がある。

外国人だけでなく、「住んでいない人」をどう守るかという視点が大切だ。避難場所への誘導と、その後の水や食料、情報、暖かさの確保など。今日、アイデアがたくさん出たので、できることからどんどんやるしかない。